



平成28年7月  
第122号  
東京都公立学校  
情緒障害  
教育研究会

### 教員の専門的な指導・支援スキルを 向上させる研究・研修体制の確立

東京都公立学校情緒障害教育研究会会長

狛江市立狛江第三小学校長 渡辺秀貴



### 変革期こそ課題解決のチャンス！

東京都の自閉症・情緒障害教育における指導・支援体制の大きな改革期に、東京都公立学校情緒障害教育研究会も新しい推進体制となりました。平成二十八年度から、全都を五つのブロックに分け、それぞれの地域で研究・研修活動を一層活性化していく体制を整えました。

この体制は、昨年度、情緒障害教育への豊かな経験と強い使命感をもつ教員がチームとなつて、時間と労を惜しまずに本会のあり方について真摯に検討してきた結果として創り出されたものです。現状分析から始め、課題を明確にしてその改善を図る組織作りが主体的に行われたことに大きな価値があります。

平成二十八年度は、この新たな組織のフレームに「魂」を吹き込み、主体的な研究・研修活動が効率的に行われ、その「質」の高まりを具現する年度とします。各ブロックを統

括する副会長の校長先生、そしてブロック担当の校長先生方には、高い見識と強いリーダーシップを發揮し、数年後を見据えた人材育成にご尽力いただきますようお願いいたします。

#### ◎各ブロックを統括する副会長

東ブロック

江戸川区立東葛西小学校

佐藤 友信 校長

北ブロック

練馬区立旭丘小学校

野田 豊 校長

南ブロック

渋谷区立加計塚小学校

林 嘉瑞子 校長

多摩南ブロック

府中市立府中第三小学校

宇都宮 聡 校長

多摩北ブロック

国立市立国立第二小学校

小林 理人 校長

### 情報化で研究活動を一層活性化

通常の学級で、学習や人間関係等に困り感を抱きながら日々生活している子供や、通常の学級集団の中では自分らしさを發揮できず安定感を得られずにいる子供たちが、個性・特性を發揮しながら成長できる教育体制作りが、今、すべての学校、すべての教員に求められています。この要請と期待に応えるためには、自閉症・情緒障害教育に直接関わる私たちの指導スキルの向上は当然のこと、その子供の成長に関わる関係者との行動連携の質を高めることが欠かせません。

特別支援教室体制の下で真の成果を上げるためには、本会が組織としての中・長期的な研究・研修目標と具体的な方策を明確にし、取り組み経過や改善すべき課題について、会員が共有していることが大切です。そこで、会員数が1500人に迫る勢いで増加している本会の実情を踏まえ、機能的なホームページを新設しました。会の目標を常に確かめながら、各ブロックの動向を把握し、当該ブロックの活動にその情報を効果的に生かしていくことができるようにしました。このホームページの果たす役割は絶大と言えます。

どこで、いつ、どのような研究会や研修会が開かれるのか、どこでどのような資料が活用されているのか、巡回指導の成果や課題は何か、優れた指導・支援の実践例は？と、

ニーズの高い情報を居ながらにして入手できるようにしていきます。また、ホームページからの研修会への参加申し込みの仕組みも整えました。

今後、関係機関のホームページやご指導いただいている先生方のブログとのリンクも考えていきます。「研究会の情報化」あるいは「研究活動の情報化」も新たな研究推進スタイルとなつていくと考えます。

### 「魅力ある研究会」を追求する

会員の直接のコミュニケーションの機会を重視しながらもホームページを有効に活用し、制度変革期の様々な課題解決をプラス思考で乗り越えていくという組織の気運を高めていくことが当面の課題です。企画運営本部及び各ブロックの係の先生方一人一人の主体性とその団結力が本会の活動の原動力となります。会員の先生方が、「本会の研究・研修活動に参画していいよかった」と実感できる研究会であること。その成果として、「この先生に出会えたことが自分の人生の転機になった。この先生でよかった」と子供や保護者に慕われるといった関係性が築かれるようになる。このような研究会像を理想として力を尽くしてまいります。

# 平成二十八年度 都情研総会記念講演 (抄録)

## 「巡回指導で行う具体的支援」

### 様々な場でのソーシャルスキルトレーニングの実際」

#### NPOフットワーク LD発達相談センターかながわ

安住 ゆう子

講演会では前半にソーシャルスキルトレーニング(SST)についての基本的な考え方を、後半には具体的な指導と教材の例を紹介していただきます。本来ならば、その全てを掲載したいところですが、紙面に限りがあるため、今回は、前半部分のお話は概要をまとめた形でご紹介し、後半部分の具体的な例について焦点を当ててご紹介させていただきます。ご了承ください。

～広報担当～

### 「SSTについて」

#### 一、SSTの必要性

発達に遅れや偏りがある人たちは①感覚・運動・行動レベルでの受け取りに苦しさがある。

②言葉のやり取り・理解・意味理解、イメージ力、状況理解の獲得のしにくさをもっている。

③行動に見通しをもったり、自分の行動を確認したりしてよりよい結果を出そうとする実行機能、メタ認知レベルでの苦しさがある。

このような認知特性があるため、社会性の習得に「まずきやすい。人との関わりがズレが生じたり、不適切な関わりでも注目してくれること

が嬉しくて、わざと相手に不快感を与える言葉を言ってしまうといった誤学習をしてしまったりする。それでもうまくいかず不全感をもってしまいうことも。そのため、社会性・人との関わりを整理し、よりよいやり方を強調し、反復することが不可欠。そういった、社会性の意図的な学習がSSTと考えられている。

#### 二、ユニバーサルデザインとしてのSST

発達に遅れや偏りがある人の支援というのは、そうでない人達にとっても有効な支援であるので、通常の学級の中でそういった要素をたくさん取り入れていこうという発想がユニバーサルデザイン。

昔と比べると全般的に人との関わりが非常に不器用になってきている、というのはよく言われることである。また、いろいろな個性・特性がある集団の中で学び合っていく共生教育という視点、様々な要素から通常の学級全体、全児童生徒にSSTが必要である。

#### 三、特別な場で期待される支援

SSTは、日常生活している学級、

地域、家庭、今までの通級、民間の療育機関、大学、病院等様々な場で学ぶことができる。通級等特別な場は、子供たちの情緒が安定し自信がもてる場であってほしい。また、その子の特性に合わせた適切な指導、在籍校や家庭での課題への直接的・間接的支援、自己理解や進路に向けての指導、保護者サポート、医療等専門機関への橋渡し等も期待される。

#### 四、アプローチ方法

SSTを行う時にはまず、具体的な目標設定を行う。その上で、次のような方法で、学んだことを実際の場面へ一般化していく、つなげていくことが大切である。

- ・ゲームや運動、ディスカッション、ディベート、ロールプレイ、作業、工作、調理といった共同作業の中で人との関わりを学ぶやり方
- ・ワークシート、絵カード、ソーシャルストーリー等の物を使って人との関わりを練習していく方法

#### 五、通級指導学級(特別な場)と通常の学級で行うSSTの違い

巡回型指導は、特別な場と通常の学級の中間的な位置付けになるかと思うが、SSTを行う場合、どんな違いがあるか整理した表が次の通り。

	通常の学級	特別な場
対象	クラス全児童	SSTの困難さを持つ対象児個人、またはそれらの小集団
頻度・時間	やり方次第で毎日多くの時間	週1回程度・1時間前後
内容	公約数に必要な内容が中心	参加児童の困難さに焦点化
長所	・実際の場面日常場面での指導が可能 ・児童のモデル児童同士の学び合いが可能	・対象児の課題に特化した教材や指導が可能 ・計画的段階的に行える ・指導者や児童同士との関係が深まる
短所 及び 短所を補う方法	・対象児に特化した指導が難しい ・いつどのように行うかは現状では教員の意識次第 ⇒特別な場または個別での対応いつどのように行うかを計画する担当者の位置づけ	・児童が生活する実際場面ではない ・モデルとなる児童が少ない ⇒生活の場(通常の学級)との連携 グルーピングの工夫

#### 六、通常の場と特別な場の両方の役割を担える「特別支援教室」

巡回指導の効果を得るためには、次のようなことが大切だと考える。

- ①対象児童に対して：
  - ×いつも監視している存在
  - うまくいくコツを相談できる
- ・学級担任と巡回指導員が共通のアクセスメントをすることができる。
- (実態に合った共通認識、一緒に応援、支援の効果を確認)
- ・本人の学級場面に一般化できる課題設定ができる。(「まずきやすい場面」に対しての事前・事後・一般化指導、学んだことを思い出しすぐ実践しやすい、やり直し可能) 構造化されたリラクセスできる場所としての存在。

### ②対象児の属する学級に対して：

×注意・世話係としての存在

- 学級担任へのアイデア提供者
- ユニバーサルデザインとして学級会・生活等でSOSTの提案をする。
- ・子供同士の相互理解のための橋渡しをする。

・通級で学習したことへの般化指導。

そのためには、チェックリスト等を活用しての実態把握も欠かせない。

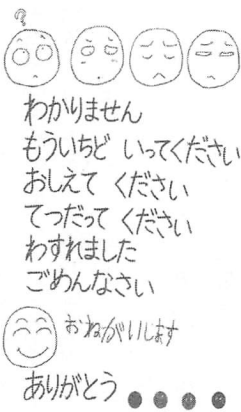
### 具体的な例

#### 一、援助要請について

##### 「困った時はどうしよう？SOSシート」

小学校低学年から困った時の援助要請が苦手なお子さんに行う。

例えば「分からないことや自分でできない時、困っちゃうよね、なんと申したらいいのかな？」と、一対一や小グループで複数のお子さんに考えてもらう。「教えてください」「もう一度言ってください」等の言葉を、「それでいいよね」と指導者が書き留めていく。そして実際の場面をロールプレイし、SOSシートを意識しながら利用していくやり方である。



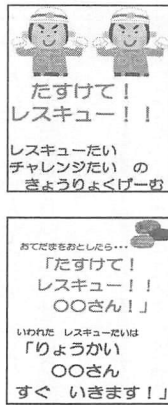
### ☆通常の学級への般化

その後、学級の中でも使っていく、

般化していくことが社会性の指導の一番大事などところ。学級と連携してSOS言葉を教室に掲示して低学年なら「みんな使おうね」と学級担任がクラス全体に投げかけられるとよい。また記録ノートのようなものを準備し、次回の通級の時に「どうだった？図工の時に言えた？」等と振り返りをしていくと、般化していくことができる。

#### 「助けてレスキュー」

これはある通級の先生から教えてもらったものを私なりにアレンジして作ったもの。レスキュー隊とチャレンジ隊と二人ペアで、役割を決めてやる協力ゲーム。



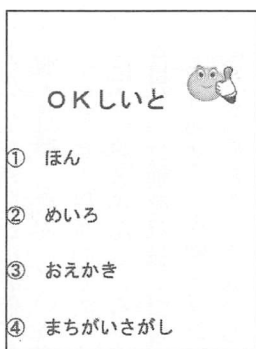
これは、「困っちゃったよ」と相手に発信する練習と、友達の名前を呼ぶ練習。自分の状態が困ったことを言いたくないお子さんが多くいると思う。ゲームでは、頭にお手玉をのせたまま高低のあるコースを進み、お手玉を落としたら、レスキュー隊の人に拾ってもらい、できるだけ早くゴールを目指すもの。拾ってもらった時は必ず名前を呼び援助要請をする。これを通級の中でやってみて、

じゃあクラスの中で名前を呼んで手

伝ってもらおうといいよね、と伝える。

### 「OKシート」

幼児や低学年のお子さんと同じように一緒にいる。みんなと同じように一緒にいる。課題ができれば望ましいが、その子の興味の違いやこだわりや強さを考えるとなかなかそれは難しいという状況、でもクラスの中で皆と過ごしていかねばいけないという現状の中でのルール作りの例。学級担任との調整がポイントになってくる。例えば、国語の漢字スキルがでないけれども、好き勝手に過ごすのではなく、先生との約束の中で、漢字を三文字書こうとか一行書こうとかをその子の目標とする。そしてそれが終わってしまった時に、先生とのこれならやってもいいよ、という緩やかな約束を守っていくことをまず目指す。徐々にOKシートの内容を減らしていくとか、変えていくとか時間を制限していくようなアレンジをしていく。いきなりみんなと同じことをやらなければダメ、できない、おしまいとなるのではなく、歩み寄っていくための一つの方法である。



### 二、行動調整「忍者の修行」

幼児や小学校低中学年のお子さんに忍者に見立てて体のコントロールの練習を行っている。これも般化を意識していく。体のコントロールやボディーイメージが苦手なお子さんは、廊下で歩く時に走ってぶつかってしまったり、荷物がたくさん下がっているところの物を落としてしまったりといったことがある。また、給食で列に並ばなければいけない時にじっとしていられてなくてトラブルを起こす子もいる。そういった時に「忍者だつたらその時はどんな動きをとるのかな」等と、子供と相談しながら取り組んだ活動をクラスの中で活かしていく。

### 三、自己理解

#### 「苦手なこと自己紹介」

### ～苦手なことを考えよう～

先週のじこしょうかいでは自分の好きなこと、とくいなことを発表してもらいました。きょうは自分の苦手なことを発表してもらいます。

- ①自分の今 苦手なことを 考えて書こう。
- ②その苦手さを へらすには どうしたらいいか 考えて書こう。
- ③みんなに どうしてもらいたい 考えて書こう。

たとえば...

安住先生は

- ①苦手なことは 右左の場所をすぐにわかることです。
- ②だから...自分では 手で鉛筆を持つふりをして 考えるようにします。
- ③みんなには わかるまで少しまってほしいです

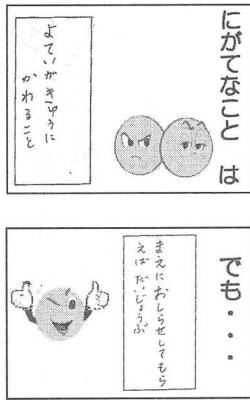
自分の苦手なところを認識し、対策を考える、そのことをグループやクラスの間にも知ってもらおうと

いう取り組み。自分のマイナスに向き合うのは気が向かない子も多いと思うので、まず、先生が例を出してみる。また、ただ「苦手なこと」ではこちらが意図している面と違うことを選ぶ子もいるので選択肢を用意しておくよ。『先生が調べたら、日本中の四・五年生は『ゲームの時に怒ったり泣いたり我慢したりすること』が苦手らしいよ。』話を最後まで聞くこと『も苦手らしいよ』といった苦手なことにリストを子供たちに見せる。これらはそのグループのお子さんたちの課題であるのだが、『日本中の子もそうだ』と思うと、その興味をもつとともに選ぶことに抵抗がなくなる。自分だけがそうだと思うとそれを選びたくないけれども、みんなもそうだと思うと選択基準が緩くなり、苦手なものを選びやすくなるようだ。

実際に巡回している小学校で、クラス全体で取り組んでくださった先生もいらっしやる。「そっか、○君は怒りっぽいところを減らそうと頑張っているから、みんなもちよっと待っていてあげられるといいよね」と、クラスの中で相互理解につながる。

「ぼく絵本」

低学年のお子さんの自己理解のために、絵本作りを行った。アレンジすれば高学年でもできる。誕生日、家族、好きな色等をページをめくると答えが分かるようなクイズ形式の構成にすると完成後も楽しめる。例



えばページ目に「○ちゃんの好きな色は？」次のページをめくると「水色」というように。そして嫌いなものや苦手なことも書いていく。ここからがこの絵本の目的である。「嫌いなものはピーマン」「じゃあどうしようか？」と対策を一緒に考える。「でも、好きなお野菜と一緒に食べてみる。一緒に食べてみれば我慢できるよ」等。「好きなことはもつともつとできて、嫌いなこと苦手なことが減っていくといいな」というページで絵本は終わる。クリアーファイルに差し込んで完成。グループで行った時はお互いに見せ合う活動も行った。また、「苦手なことは何かかな？」とオープンクエスチョンを出しても、出てきにくいので、「初めての場所で話すこと」「失敗しちゃった時」「大きな音」「やりたいことがやれない時」など子供たちが苦手だと思うものを選択シートとして用意しておくこと作業が進みやすい。

「自己理解チェックリスト」の工夫

先生方も、そのお子さんたちにあったチェックリストを作成して実施していると思う。お子さんに

よっては、自分は全部できていると、すぐ過大評価、また、全然できないと言って非常に過小評価、または「普通・普通・普通」という形で自分の中で得意不得意の濃淡・強弱を付けにくいお子さんもいる。そうすると自分の行動を意識しづらくなってしまうので、「このプリントの中では、どちらともいえないの回答は二回までしか使えません」という条件を付けるとか、非常に自己評価が低いお子さんには、「全くできていないオール1は二個までしか付けてはいけないよ」とする。ルールを守れないければこのチェックは成り立たないが、何でも自分はできていると思っているお子さんには「一番できている順に1から5まで順番を付けて」とすると、「5番と付けたから、これをちよつとチャレンジして成長できるといいよね」と、その子が課題に向き合うきっかけを作ることができる。

次は同年齢のお子さん比べて自分はどうなのかを比べる評価の仕方の例である。男子高校生のチェックの例だが、内容を変えれば小学生、中学生でもできる。一般の高校生に対しての評価をまずしてもらって、次に「自分はどうなのかな」ということをもう一度評価してもらおうというやり方。グループみんなの結果を共有しながら「実は世間の高校生は自分の文房具は自分で買うんだね」と話しながら、自分でやってみるきっかけとしていく。

テーマ1: 高校生男子、どこまでやればいい?

次のこと、高校生は当然できていいこと? まだ無理? そして自分は? 高校生ならあたりまえ...○ 微妙、半々な...△ まだできなくともよい...×

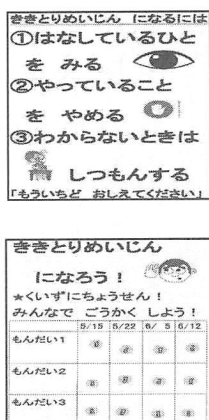
自分ではできている...○ 微妙...△ できていない...×

	高校生としては	自分としては
① 朝、遅刻しないように自分で起きる(親に起こされない)	△	△
② 自分で弁当を作る(親に作ってもらわない)	X	X
③ 自宅学習は自分一人で行う(親に手伝ってもらわない)	△	△
④ 文房具や洋服、靴などは自分で買う(親に頼まない)	X	X
⑤ お小遣いはもらわないでアルバイトしたお金を使う	X	X
⑥ 私服のコーディネートで自分で決める	△	△
⑦ 出かける時の持ち物準備を自分でやる	△	△
⑧ みだしなみや衛生面に気を使う	X	X

四、聞く姿勢

「聞き取り名人になろう」

四、五月の指導のスタートとして人の話をしっかりと聞くということ、を強調される先生方も多いことと思う。低学年のお子さんには、年度の始めは聞き取りクイズを行い、聞いたらシールを貼っていく取り組みを継続的に行っている。



五、聞き取りやすい話し方

「名アナウンサーになろう」

高学年から中学校のお子さんに行ったものです。聞き取りやすい話し方には「ハード面(分かりやく聞き取りやすい話し方をする)」と「ソフト面(話す内容)」がある。

まず「ハード面」は声の大きさ、速さ、滑舌、ということを意識するためにアナウンサーに見立てて行う活動だ。「声の大きさ」は、遠いところから話してみる。声が大きすぎて、怒鳴っているようなお子さんは逆に小さく話すことで距離を意識していくとよい。次に、「声の速さ」について。NHKのアナウンサーが一分間に話す三〇〇文字の文章を用意する。「これを一分間に読むと、丁度分かりますいアナウンサーの速さだよ」と言うと、一生懸命ストップウォッチを見ながら練習してくれる。早口でしゃべるお子さんも意識しながらスピード調整をして、話すことができた。次に「聞き取りやすく、はきはき話そう」ということについて。興味のあることを一方的に話すお子さんには本やネットで見られる面白い早口言葉、例えば「右耳にミニニキビ」等、子供たちは楽しみながら分かりやすく話そうとする。これも学級に般化していく方法としては教科書の音読の導入としてやってみることが出来る。

六、上手な主張の仕方

「言葉のボクシング」

これはディベートのようなもの。高学年や中学校のお子さんで行った。自分の意見を相手に怒って伝えるのではなく、建設的に話をすることも目指したもの。床に赤と青のマットを敷いてまず赤マット、赤コーナーの子供からお題に合わせた

主張。例えば「スポーツならサッカーが一番」、「野球が一番」というお題に合わせて、それぞれがよさと相手のマイナスイ面を話す。スピーチをしていない周りの先生や友達がどちらの話の方が説得力があったか、納得がいったかを、何回かやり取りをしていく中で判定していく。基本ルールとして、相手の批判を適切にする、感情的に言うのではなく、「こういうところが、野球というのはサッカーに比べると魅力が欠けると思いますが」と声を荒げないで主張すること、自分が負けても怒らないことは予め明言しておく。適切に主張することをゲーム仕立てで行う活動だ。

七、感情表現

「今日の気持ちは？」

出席表に今日の気持ちを表情シールで貼ったり、数値化して今日は何点、何パーセントかなど自分の気持ちを表現したりする。これは、通級でも学級の中でも取り入れられるもの。

今日のエネルギー		気分いいばい	
日	ち	シール	きょうのエネルギー
月			

「気持ちのエレベーター」

感情の強弱。同じ嬉しいというのでも、五階はすごく嬉しい、一階はそうでもないという形で「喜び」と「怒り」のランク付けをしてみたら、「どんな時にすごく嬉しいかな」「そんな時は言葉に表すと？」と、感情表現の練習をする。その後、学校の

作文指導にもつなげ、般化していくこともできる。

★感情のエレベーター

うれし気分にも、いらいら気分にも（自分自身）が得意です。すぐくぐりいれ、悪い気分、怒り気分も言葉でエレベーターに乗せよう。気分転換のヒントがここにあります。自分と他人の感情を表現しあう。覚えておきましょう。

5階	宝くじが当たった	7-11
4階	好きなお菓子を食べて	おれぞ!
3階	お気に入りの服を着て	よかたー!
2階	お気に入りの場所へ	いいぞ!
1階	お気に入りの音楽を聴いて	うん!

八、感情調整

「ナイスプレーヤーになろう」

ゲームをやる前に「ナイスプレーヤーになろうね」「ナイスプレーヤーってこういうことなんだよ」と確認してからゲームをする。例えば「負けても怒らない、泣かない、とびださない」「勝っても自慢をしない」というもの。そして教室の中で「今度の体育の時もナイスプレーヤーでやるんだよ」とつなげてあげることが大切。また、「時間で終わる」などナイスプレーヤーの内容もお子さんの実態に合わせてアレンジするとよいでしょう。

「イガイガ気分を伝えよう」

「ちくちく言葉は使わないようにしましょう」という指導をよくやられると思う。では、嫌な時に何言ったらいいのだろうか。嫌な気持ちはあるわけで、それをどう表現するか。表現の仕方を教えてあげないと、結局我慢して、手や足が出たり、パニックになったりする。嫌な気持ちが沸騰する前に、爆発する前に言えるように、発散できるようにする練習が

とても大事。

イガイガ気分を伝えよう

いやなきもち は まずしんこきゆう  
 あいての目をしっかりとみて  
 ゆっくりと 低い声で  
 なにがいやか どうしていやか  
 ことばでつたえよう

かっけにきめられるのいやだからやめて!

そういわれるのいやだからやめて!

近くで大きな声だされるのいやだからやめて!

九、思考の柔軟性

「短所を長所に変えたいやき」

高学年から中学生くらいに行こう。短所を長所に変えたいやきという市販のカードがある。リフレミングして視点を変えましょうというもの。「おおざっぱ」というのも、言い方を変えれば、「おおらか」なんだよ、と発想の転換を促すことを目的とする。「自分なんかだめなんだ」というマイナスイ思考になりがちな子に、「見方を変えればこんな風に考えられるよ」ということを、カードゲームで体験するもの。

十、協力「引越し屋さんを運んだ」

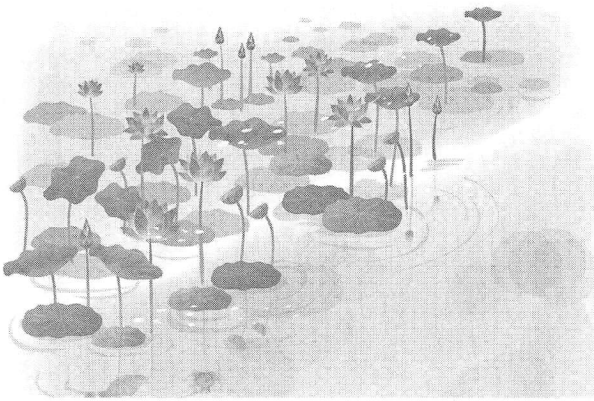
「だるまさんが転んだ」と同じようなルールで、物を運んでいくゲー

ム。複数の人と運ぶと得点が増えるルールにする。その後、学級に一般化していくとよい。例えば総合の時間での新聞作り、運動会の応援団、学習発表会などの中で「協力するってどういうことかな」「一緒に『いつせいのせつ』で声を合わせるってどうかな」とか、「新聞で役割分担をして、自分の任されたところを書くということが協力ってどういうことだよ」と具体的な協力行動を考えていく。ゲームをした後に「生活場面の中で置き換えると、どんなことが協力になるのかな」ということを考えて実践することが大切。

十一、見直し・プランニング

「今月の予定」

自分がどのくらいの時間にどんなことがやれるのかと、時間の逆算をしていく。すぐくスローテンポで、行動が遅いタイプのお子さんに時間を意識してもらうために取り組んだ活動。「机に荷物を全部入れるのは、何分くらいでできるかな」と、最初は自分で時間の予想を立てて、実際にやってみて、記録を更新していくという取り組み。更新したら、その時間を「時間貯金」のグラフにポイント化して貯めていく。貯まった時間でお楽しみ活動ができるシステムにしていく。作業を早くすると自分にとっていいことがあるんだという経験ができる。



参考文献

- 「教室・家庭でいやすく使えるSST」かもがわ出版 安住ゆう子・三島節子
- 「あたまと心でかんがえよう SST(ソーシャルスキルトレーニング)ワークシート」かもがわ出版 NPOフットーロ LD発達相談センターかながわ
- 「ワーキングメモリーとコミュニケーションの基礎を育てる聞きとりワークシート」かもがわ出版 NPOフットーロ LD発達相談センターかながわ

第四十九回全国情緒障害教育

研究協議会

徳島大会案内(その2)

八月二十五日(二十六日の二日間、徳島市のあわぎんホールにおいて標記の大会が開催されます。記念講演、基調講演、シンポジウム、分科会等が予定されていますが、都情研の先生方にとって最も関わりの深い内容は、大会二日目の第2分科会「小学校段階の将来を見据えた指導・支援」だと思います。発表2では、「通級指導教室と通常の学級を結ぶ」通級指導教室に通う児童の小学校から中学校への接続」という内容で、埼玉県所沢市立並木小学校教諭、坂本條樹先生が発表され、助言者として徳島大学大学院総合科学研究部教授、上岡義典先生からコメントをいただきます。坂本先生はその優れた実践で全国的にも有名な先生です。大会全体の内容は配布された2次案内をご覧ください。

さて、平成二十九年度は東京で全国大会を開催することになっております。都情研の先生方が中心になって運営する大会となります。全情研50周年の記念すべき大会でもあり、都情研の力を結集してぜひ良い大会にしたいだけだと思います。一人一人の協力が不可欠になります。よろしくお願いいたします。

全情研事務局長 有澤直人

都情研ホームページ活用をお願い

現在、「都情研ホームページ」を活用し、研修情報の周知、通知文書のダウンロード、研修会事前申し込み、定員制等の仕組作りを進めています。背景には、設置校や拠点校数の激増による、事務量の増加、研修会で参加者が施設に入り切らない事態など、会の存続自体が困難になることが予想されたことがあります。

関係の皆様には、ご不便をお掛けしますが、「都情研ホームページ」に注目いただくとともに、状況報告や建設的なご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

なお、セキュリティ上の理由により、入力フォームが開けない、ホームページ自体が見られない等の学校があるようです。改善を積み重ねて参りますが、しばらくは区市町村内の学校間で声を掛け合い、当面の措置として他のPC等、補助的の手立ても活用しながらの対応をよろしくお願いたします。

企画運営本部総務 上山雅久

編集後記

編集・発行

企画運営本部広報担当

各ブロック 広報係

八王子市立由井第一小学校

042-642-4201

印刷 (株)ワールドミーディング